

※〔 〕内は訳者による付記。〈 〉は原文にはない。文中の「本書」とはベルベーロワ著『アレクサンドル・ブロークとその時代 伝記』を指す。

ドミートリー・ブイコフ¹

五番目の B〔ベア〕

訳・村野克明

アレクサンドル・ブローク〔1880. 11. 16(28)-1921. 8. 7〕に関する論文と本は汗牛充棟の有り様を呈しているが、この詩人について本当に書いたものはあるのかというと、ロシアではこれが実に少ない。なぜなら、ロシアの読者は（とくにロシアの書き手は）いつもブロークの催眠術に引っかかって言語能力を喪失してしまうからだ。あぐりと口をあけブロークに見入ったまま、「いいなあ！」を繰り返すばかり。どうして「いいなあ」なのかと尋ねても、答えられはしない。

一方、ブロークに関するどんな論文にせよ、いかに異なる結論にせよ、そうした文章を読んでの最初の反応は、決まって、「むつかしすぎてわからん!」、である。ためしに、ベルベーロワを読むとしよう。

「終末論的思考はブローク特有の最大限綱領主義の表現である。」

あるいは、何かほかの、同じような、有無を言わさぬ説教者口調の文言に出会うとしよう（というのは彼女はこうした公式的文言を好んでいたのだ。たとえば代表作『強調は筆者』では古典作家や同時代人の決まり文句をかなり援用した）、——そうすると読者は絶句して、内心、のたまうことだろう。

「えっ、一体どこから最大限綱領主義なんて持ち出してくるのか。概して、ブロークの〈破滅への愛〉とは、その気質、その出自、その生活様式のかくも複雑かつ深奥な様相と相関関係にあるものだ。そんなことは、ブロークの本のどの頁を見ても明々白々ではないか！ だが、どうしてもブロークの不明な部分を言語化して明るみに出さなければならぬのなら、その場合は、少なくとも学術的に、深々と、多くの事情と観点を考慮に入れながら、その作業はなされなければなるまい」。

だが、そうした手続きで出来上がった著作が、持ち重りのする、ふんだんに頁があるヴラジーミル・オルロフ著『ガマユーン』〔1980 年刊。720 頁のブローク伝。ガマユーンはロシアの伝説の予言鳥〕なのだ。たしかに詳細な記述はなされている、だが、じつは何も語られてはいない、という本である。

ブロークに関わると、どうしてそうなるのか、いやもっと正確に言うと、どうしてそうならないのか。

まず最初に思い当たるのは、ブロークがプロの詩人として〈読者が抒情詩の主人公と自

¹ 現代ロシアの詩人ドミートリー・ブイコフ〔1967 年生〕の本論文は、以下の本の巻頭を飾った。ニーナ・ベルベーロワ〔1901. 7. 26(8. 8)-1993. 9. 26〕著『アレクサンドル・ブロークとその時代 伝記』（モスクワ、2015 年刊、256 頁。フランス語から露訳）。

己を同一化するメカニズム>に精通していた、ということだ。だからこそ、その抒情詩の空間の中へとあつという間に移動させられた我々は、その空間を自分たちの個人的な経験と記憶とで満たすことになる。ブロークには多くの読み方があり得えようが、どんなに気ままな読み方をしている、突如として<瞬間的な精度>が、<絶対的な全一性の証拠>が読み手の心を刺し貫くのだ、ちょうど「街道に舞い上がる塵埃の中、一瞬にして、ショールの下からまなざしが煌めく」がごとくに。

万事に無関心で、とうの昔から救いがたく自らの悪意に蝕まれている者であっても、生涯に一度も息が詰まるような抒情的な歓喜を覚えたことがない、なんてあるだろうか、たとえ、絶望を伴ったものだとしても。どこかで緑色の落日を、又は秋の海を、あるいは小駅に佇む麗しき女性を眺めた際には、どうだったろうか。その瞬間、我々は完全に分ちあがたくブロークの抒情詩の主人公と融け合う。

なぜか。それは（たとえばプロツキー〔1940～1996〕の場合によくそうなるように）こうした一体化のなかで我々がより美しく見えるから、ではない。そうではなく、この詩人に対して我々が自己のすべてを語るができるから、なのだ。アフマトワ〔1889～1966〕流に言うなら、ブロークは我々の皮膚にあるひどくおぞましい潰瘍に軽く触れて来る。その抒情詩は外科用のメスではなく、歯に衣を着せぬ表現ではない。そうではなく、ユニバーサルなもので、万人に向かってすべてを語る音楽である。ブロークは微かな風として、開かれた傷口の上を吹き渡る。降る雨として、焼けただれた皮膚に触れる。この音楽には、幾つかの、狙いの定まった参照記号が備わっていて、それらは、誰にも共通の不可避的な経験を指し示す。つまり、詩のほんの一行だけで、また、その不用意な失言によっても、ブロークが我々のことを語っているのだ、と我々は理解する。天空の透明な天井を擁する、あの空中の部屋部屋は我々のものだ、と理解する。その場所で我々は遠慮なくくつろぐ。

だが、なぜそうになってしまうのか、と説明を求められても、我々はこう叫ぶばかりだ、「むつかしすぎてわからん！」と。なぜならば、我々自身が「むつかしすぎてわからん」存在だからだ。「自己を言い表そう」なんて考えたら、何と多大な説明努力が要ることだろうか。ということで、皆が語るのは、じつはブロークのことにあらず、〔語り手各々の〕自己のことである、という次第なのだ。ブロークについては、ただ「いいなあ！」と発言し得るのみ、それも概して何事かを理解していれば、の話ではあるが。

ロシア文学には、まさに<ブローク>についての書物が、二冊、存在する。どちらも〔著者の〕<自己>についての書ではない（<時代>についての書でもない。<時代>は複雑だがブロークよりもわかりやすく合理的ではあるけれども）。

一冊は、コルネイ・チュコフスキー〔1882～1969〕著『人と詩人としてのアレクサンドル・ブローク』〔副題「ブローク詩入門」〕で、これは詩人の死〔1921.8.7〕後すぐに書かれた〔1924年、プラハのアドルフ・マルクス社刊。『晩年のブローク』『ブロークについての書』の既述の二著を改訂・合体したもの〕。もう一冊が、ベルベーロワ著『アレクサンドル・ブロークとその時代』である〔1947年にフランス語版で刊行。そのロシア語版のロシアでの最初の出版は1999年〕。

両者を比較してはならない。というのは、チュコフスキーは自らのヒーロー兼偶像の身近にあって、多くの会話を交わしていたからだ（ブロークも彼には胸襟を開いていた。ただし、相も変わらず寸鉄人を刺す発言や、あてこすり、数々の失言をもってしてだが）。

一方、ベルベーロワはブロークを何度か遠くから見かけていて、その声を耳にすることはあった。

チュコフスキーは20世紀で最も炯眼かつ洞察力ある批評家の一人であるが、ベルベーロワは全然、批評家ではない。彼女は大変すばらしい読者であり、揺るぎなくも「第二列」を占める才能に恵まれた作家である〔「第一列」はプーシキン、ドストエフスキー、トルストイなどの文豪が陣取っている〕。

チュコフスキーは抒情詩について多く執筆し、申し分ないセンスを備えていた。ベルベーロワは何よりもまず、時代に取り残されないように努めた。そのセンスは強く情況に依った。彼女が「その時代」について語る時は、周囲が気が滅入るほどにも気位が高かった。ブロークの操行点や成功・不成功ぶりをその友人たちが評定したりすると、彼女はその誤謬を容赦なく指摘した。が、こうしたことはすべて、ブロークとは関係ない。ブロークに対してベルベーロワは敬意を抱いていた。これぞ最良のギムナジウムの伝統というものだろう。このことこそ、本書〔『アレクサンドル・ブロークとその時代』〕で最も重要なことなのである。

それにしても、何ゆえに、ブロークについて、このようなベルベーロワが書かなければならなかったのか。ロシア文学界で最も合理的で、自信に満ち、（1930～1950年代の尺度で）現代的な女性が、という意味だが。現代ヨーロッパを毛嫌いしていた（何が好きかといえば中世ヨーロッパなのだ！）そんなブロークのことを、どうして、あんなにもヨーロッパ的な彼女が語らなければならないのか。

ブロークは全然、モダニストではない、だから『スキタイ人』で幕を閉じたのだ。未来を見ず、過去に生きている。とわに、過去へのノスタルジアを感じている。一方、ベルベーロワはまったくのモダニストである、文学上の趣向から家族観に至るまで。

ブロークはほとんど女嫌いと言ってもよく、ストリンドベリ〔スウェーデンの劇作家、小説家。1849～1912年〕の熱烈な信奉者である。彼にあっては、＜永遠に女性的なるもの＞への崇拜は、現実に見られる女性的な視野の狭さや食欲さとの、ありふれた、びくびくした、しばしば蔑んだ関係とは、まったく無関係なのだ。一方、ベルベーロワは女性解放論者の秀でた典型であって、彼女にあっては、性の不平等に関するどんな話でも笑うべき偏見にすぎない。

それにしても、なぜ、こんな彼女が？

その原因としては、まず第一に、以下のことが挙げられよう。——研究の対象は、研究者から最大限、遠く離れていなければならない、ということだ。〔研究対象と研究者との〕相互の影響を最小限のものにするために、である。ベルベーロワは舌足らずな言い方はしない。抒情的な気音は避ける。出来る限り客観的である。

否、彼女には文芸学の知識が不足している、そのことがブロークの詩学を理解する妨げとなっているのではないか、という指摘もあろうが、しかし、これは別問題だ。彼女はたしかに「オポヤズ」〔「詩的言語研究会」＝シクロフスキー〔1893～1984〕、エイヘンバウム〔1886～1959〕、ジルムンスキー〔1891～1971〕などの「フォルマリスト」グループ〕の一員ではない。構造主義者でもなく、文学史家でもない。しかし、彼女は＜歴史＞を知っているし、感じている。ブロークの＜精神生活＞を、その＜進化＞（心理と文体の）を、彼女は、理解している。

第二の原因は、より重要かつ複雑、である。——対立物の統一と相互の引力、というこ

とである。

ベルベーロワは抒情的なく霧がかった曖昧さ>を好まない（まさにそうしたものでブロークの抒情詩の大部分が成り立っているわけだが。こうした<霧>が立ち込めた中でなら、読者のどんな読み方でも受け入れ可能で、すっぽりと吸収されてしまう）。ベルベーロワは小児症を軽蔑するが、ブロークは永久に小児症的であり、永遠にそれを誇りとしている。ベルベーロワには感傷癖はなく、概してさほど感情に囚われない。彼女の愛は何よりも行動として表現される。彼女は恋人にすべてを捧げる。嫌いになれば一瞬たりとも一緒にはいない。

——要するに、彼女はまるでブローク型の人間ではないのだ。

しかし、本書〔『アレクサンドル・ブロークとその時代』〕はまさに、<非合理的なもの>に対する理性の思慕〔トスカ *тоска*; yearning〕によって書かれている。彼女にあっては、<感傷的なもの>には<残酷なもの>が、<不可解なもの>には<明瞭なもの>が思慕する。平面は容積を、平原は密林を、思慕する。

ベルベーロワはブロークを理解するには賢すぎる。彼が自己の著名なく霧>を見ている場所で、彼女はすべてを明瞭に見る、まるで地形図に対してのように。だが、<霧>の中を散策するのは素晴らしいし、恐ろしい。地形図となると、そんな散策は不可能だ。

20世紀はじめの人々へのベルベーロワの思慕、あの時代にはまだ、多弁で、涙もろくて、ロマンティックな人間があり得たのだが、そういう時代への彼女の思慕は、常に、その詩句とメモワールのなかに現れている。彼女が嘲笑し弾劾する際には、とくにそれが顕著だ。当時からして、彼女は熱烈に、そうした人間でありたかったのだ。ところが、新たな時代では、生き残らねばならない。満面に笑みを浮かべたり、すすり泣きしたりしてはいけぬ。理解し、分析し、眼を逸らさず前方を見詰めなければならない。——ベルベーロワはこうしたことはすべてやった、しかし、愛と思慕は隠しようがない。彼女が愛するのは19世紀の申し子たちなのだ。20世紀の人々とは、やむを得ず折り合いをつける関係であった。

総じて、20世紀の人間にとっては、先駆者たちとの関係を構築するのは困難だった。というのは、彼らは、期待が裏切られ、大きな神話が崩れた廃墟の中で、生きなければならなかったからだ。すなわち、当時パステルナーク〔1890～1960〕が書いたように「平等と友愛についての貴族の習字手本」はぼろぼろになり、腐敗の臭いを放っていた。「どんな夢であっても夢は裏切るもの」と認めざるを得なかった。実際に、ブロークは他の誰よりも社会的ユートピアを信じていなかった（彼には良き未来は破滅と同義だった）。彼はユートピアで生き残りを図らなかった。ユートピアを呼び寄せようとしたのみだ。だが、そこに自分の居場所は見いだせなかった。

ベルベーロワはたぶん、ブロークに嫉妬していただろう。ブロークが、より遠い所を見て、より多くを理解し、音楽を自己に従わせたからだ（より正確には、自己を音楽に従わせた、である。ベルベーロワが懸命になって〔音楽を〕掴み取ろうとしていた同じ場所で彼は楽々と我が身をゆだねている）。嫉妬したのは彼女ばかりでない、その世代のほぼすべての人々が、そうだった。というのも、ブロークはロシアではちょうど絶好の機会に他界したからである。死んだ時には、数世代にとっての聖人であり、この上なく明白で首尾一貫した生涯を完結していたし、さらにその生涯は、美学的な、何らかの意味で聖人伝的なステータスをも付与されていたからだ。ブロークはロシア文学界で救世主の姿はしていない（我々の救世主とは国民的倫理の創始者プーシキン〔1799～1837〕である）。だが、

ブロークは、言うまでもなく、使徒の姿をしている。ここにこそ、一見すると上辺だけに見える（が、本物かもしれない）彼の無垢性、理想的な純潔性、非・矛盾性を解く鍵が隠されている。すなわち、プーシキンは矛盾であざなわれている。救世主には可能なことだ。だが、使徒にはこれは無理な話なのである。

ブロークについてのベルベーロワの本書は、非・聖人（そして非・教会人）ではあるが、熱烈に信仰を思慕している同時代人によって書かれた聖人伝である。「精神生活は数理公式の言語に翻訳される」——とはストリンドベリの作劇法に関するブロークの覚書の文句だが、彼女はこれを引用している。こうした〈翻訳〉とは常に不完全なものだが、本書の中に、形式上の優美さ、厳格さ、純粹さが備わっていることは認めざるを得ない。

本書はロシア人のためには書かれなかった。どうやら、ベルベーロワがロシア人から正しい理解を得ることをあきらめていたから、そうなったらしい〔本書のオリジナルはフランス語で書かれた〕。つまり、本書は、外国人のために書かれた。当時は「最後の」と思われたロシアの大詩人に対して外国人が関心を抱いてくれるだろう、と彼女が期待したからだ（これは大いに時宜を得たことだった。なんとすれば〔ブローク死後のロシアに残った〕残りのすべての詩人たちは多かれ少なかれ妥協を余儀なくされ、迎合主義的体験をし、総じて不如意な死を迎え、不本意な生を終えることになったから）。

本書には、西欧の伝記では周知の特徴がすべて備わっている。すなわち、冷静に厳選された日常生活のディテールの具体性と説得性、多くの地理的知識、土地の神髄、土地の「守り神」への関心、である。——ここから、ブロークの全居室と〔1881～1916年の間ブロークが毎夏すごした〕シャーフマトヴォの屋敷と土地についての見事な記述が生れる。ベルベーロワは一度としてそうした場所へは行かなかったのだが。さらに本書では、戦術的な、ピタッとはまった引用がなされている。相異なる資料同士の衝突も、ある。そうやって論争させることによって、真実を、ではないとしても客観性と容量を生じさせるために、である。最終的に、ベルベーロワは読者に対していかなる結論をも押し付けないが、きちんと結論へと導く。本書は、たいへん抑制の取れた、教養のある、ブローク的な意味で純粹な書物である。しかし、肝心なことは、本書がブロークへの崇拜の念によって、そして、真の愛では大切なことだが、自己の不完全さへの意識によって、満たされている、ということだ。それは、自己陶醉から生れる愛でもなく、自己過信に役立つ愛でもない。ブロークについてのベルベーロワの本書は、最高の意味で、温順の書である。このことが本書をブロークにふさわしいものとした。なぜなら、ブロークは日常生活に関わることには何であれ、しごく温順だったから。しかし、事が芸術に及ぶと、態度は一変し容赦しなかった。

シンボリズムの時代のロシアには四つの偉大な<Б>〔ベーの文字で始まる詩人〕があった、とみなされる。それは、二つの優れた世代のシンボリストたちである。つまり、バリモント〔1867～1942〕とブリューソフ〔1873～1924〕、そして、ブローク〔1880～1921〕とベールィ（本名ブガーエフ）〔1880～1934〕である。

ベルベーロワ〔1901～1993〕は五番目の<Б>である、と私は思う。「銀の時代」²の偉大

² 一般に、ロシア詩の「銀の時代」とは19世紀末～1920年代はじめ（ブロークの死とニコライ・グミリョフ銃殺まで）を、「金の時代」とはプーシキンを頂点とする19世紀第1三半期を指す。前者は20世紀最初の20年余の激動のなか、詩と文学のみならず芸術、演劇、哲学などの分野で顕著な実績を挙げた。「ロシア・ルネサンス」とも称される。

な女性だからだ。上記の四名にせよ、皆、彼女に憧れたが、決して彼女に会うことがなかった。彼らが得たのは、ニーナ・ペトロフスカヤ〔1879～1928年、作家。モスクワでシンボリストのための文学サロンを主宰。最後はパリで自死〕のような、宿命的な女性たちだった。かなり素朴かつ尊大で、悲劇的だが、実を言うと浅薄な女性たちであった。〔彼女たちと比べ〕ベルベーロワは遅れて来た女性であり、自分の先輩の同時代人たちの理想を实らせた時は、すでに、あまりに遅きに失していた。だが、彼女は非凡な知性を持ち、自己の存在の充実に稀なほど満たされた女性であった。まさにこうした生命の力を求めて、ブロークは死を前にして若きエレナ〔正しくはエヴゲーニヤ〕・クニボヴィチ〔1898～1988〕（未来の社会主義リアリズム派の批評家）にあんなにも惚れ込んだのだ。もちろん、このエレナをベルベーロワと比較するのは、「月にスッポン」である。ベルベーロワは彼ら〔上記の四詩人〕の誰のものにもならなかった。だが、彼女自身はこのことが悲しかった、と私は思う。

しかし、彼女がブロークと会えたとしたら何を話したろうか。もちろん、ホダセーヴィチ〔1886～1939年、詩人。ベルベーロワの夫〕とは、実際の対話があった。彼はブロークとは違ってごく知的で、かつ、ひどく毒々しいことを口走る話し相手であった。ブロークはどんどん黙り込むタイプだったが、その沈黙はどんな対話や毒舌よりも、多くを語った。

「詩を10篇作るとすると、私の場合、上出来なのはそのうちの五篇、ブロークの方は二篇。だが、その二篇たるや、私には、手が届かないしろものなのだ」

とマヤコフスキー〔1893～1930〕は語った。いや、誰にとっても手の届かないもの、と言えるのではないか。

ブロークはどんな時代にでも理解される、とは言えない。というのは、彼は<前夜>の詩人だからだ。ブロークの場合、<存在の生地>を通して、その裏側から、時として透けて見えてくるものがある。それは、その木綿地のベールの向こう側にあり、激動の時代のみ見えてくる<真の現実>なのである。

我々は今、<前夜の前夜>にある。したがって、ブロークは時として、新米読者の受け止め方で言うなら、内容が空疎だとか、余りにも弱々しく音楽的だとか、さらには惰性的だとか、と思われるだろう。だが、彼の一語一語が意義を持つ時が近づきつつある。よって、ベルベーロワの本書は今、たいへん時宜にかなっている。本書は、ブロークについて何も理解していない者をブロークへと引っ張り込む。そのあとは、ブローク自身がすべてをこなすだろう。もう一度、繰り返す、ブロークの時代が到来しつつある、と。我々は「ロシアの恐ろしき時代の申し子」であるからして、これを結語とする。